

# 3-1-2

## パネルディスカッション

遊びの質を高める保育のあり方

### panel discussion

司会●**榊原洋一** Sakakihara Yoichi …………… CRN 所長、お茶の水女子大学大学院教授

パネリスト●

**河邊貴子** Kawabe Takako …………… 聖心女子大学教授

**上垣内伸子** Kamigaichi Nobuko …………… 十文字学園女子大学教授

**大豆生田啓友** Omameuda Hiroto …………… 玉川大学准教授

### 遊びの質を高める 保育のあり方

#### 「誘導保育」に通じる 「Guided play」の保育観

**榊原●** 本日はよろしくお願いします。河邊先生のご講演では、最後にGuided playについて言及されました。Guided playは、米テンプル大学の発達心理学者キャシー・ハーシュ＝パセック氏のグループなどが提案していますが、児童心理学者である倉橋惣三が提唱した「誘導保育」という保育観に似たものを感じます。

**大豆生田●** 河邊先生は、雪という環境の中で、子どもが協同して遊びが広がり深まったりした事例を紹介されましたが、あの場面での保育者の援助は、倉橋の考え方に通じる面があると思います。倉橋は、「生活を、生活で、生活



に」という言葉を掲げ、「さながらの生活」が幼児期の基盤として大切だと唱えました。子どもが登園したら、自分で好きな遊びを選んで過ごす時間をまず大事にする。それは好き放題にさせるという意味ではなく、倉橋の言葉を借りれば、「自由と設備」が与えられています。「設備」は「環境」を意味すると捉えると、雪という環境に「自由」にかかわる状況が、あのような多様な遊びを生み出したわけです。

倉橋が「さながらの生活」を重視した根底には、子どもは自由に学び、自己を充実させる力があるという信念がありました。主体的に環境にかかわって遊び、学ぶ力を尊重したのです。しかし、当然、上手く遊びに入れない子どももいます。そういう場合は、自己充実を求めるだけでなく、何らかの手助けが必要になり



**大豆生田啓友**：玉川大学教育学部乳幼児発達学科准教授。青山学院大学大学院文学研究科教育学専攻修了後、青山学院幼稚園教諭などを経て、現職。専門は、幼児教育学・保育学・子育て支援。日本保育学会理事、NPO法人びーのびーの理事などを兼任。主な著書に、『支え合い、育ち合いの子育て支援—保育所・幼稚園・ひろば型支援施設における子育て支援実践論—』（関東学院大学出版会）、共著に『子どもを「人間としてみる」ということ』（ミネルヴァ書房）など。



河邊貴子  
聖心女子大学教授

ます。

倉橋の誘導保育論の中でも、保育者の援助により、遊びや生活に筋のようなつながりを持たせることの大切さが述べられています。雪遊びの事例でも、保育者が遊びの様子を読み取りながらかかわることで、遊びを単発で終わらせず、つながりを持たせていました。そこでは、河邊先生が話されたように、子ども主体と大人主体の二項対立ではなく、個々の子どもと保育者との相互のやりとりが大切であると改めて感じました。

河邊先生に一つ質問です。絵の具という刺激的な素材は遊びに大きな影響を与えますが、保育者はどのような意図や思いから、子どもたちに提案したのでしょうか。

**河邊** ● 遊びの中で生じた見通し、それから目的が明確になってきたことを踏まえ、「ここだ！」と考えて提案したのですが、確かに大きな賭けだったと思います。もし3歳児に提示していたら、遊びがぐちゃぐちゃになってしまったでしょう。保育者は、床の上にひっそりと置くようにして絵の具を提示し、あくまで子どもの思いを尊重する姿勢でした。そこには深い子ども理解と同時に、絵の具という対象物に対する保育者自身の経験や理解があったのだと思います。

子どもと一緒に雪の滑り台を作る場

面では、若い保育者自身に雪遊びの経験があまりなかったようで、怖がってなかなか高くしませんでした。それを見ていたベテラン保育者が、「もっと高く大丈夫」と声をかけていました。そういう点には、保育者自身の経験の差が表れます。

## 「自分で選んだ」と思える遊びの選択が重要

**上垣内●** 河邊先生のご講演をお聞きして考えたことをいくつかお話しさせていただきます。

Guided playに関して、大人が文脈を開始させるというお話でしたが、遊びの選択というプロセスは、倉橋の誘導保育でも非常に慎重に考えられています。遊びは子どもの興味・関心に始まり、その時代の社会・文化状況に応じ、家庭や社会との繋がりの中から選ばれ、そこには保育者自身の子ども時代の原体験も織り込まれます。そのように子どもを尊重する意思があるからこそ、子どもは「先生から与えられた」とは思わず、「自分がやりたくて始めた」という感覚を持てるのでしょうか。そうした意味からGuided playを考える上では、特に遊びの選択は重要であると感じました。

またGuided playにおいては、大人からのフィードバックや深い質問を受けることで学ぶというお話でしたが、環境を通して保育することを考えると、モノやコトにもそのような機能があるのではないかと思いました。対象と深くかかわることは、まさに対象と対話することです。対象そのものが、子どもに対してフィードバックをもたらしたり、質問を投げかけたりすることもあるでしょう。ですから、保育者の役割はもちろん重要ですが、遊びの対象そのものを大切にする必要があると思いました。



**上垣内伸子**：十文字学園女子大学人間生活学部幼児教育学科教授。お茶の水女子大学大学院児童学専攻修了後、国立総合児童センター「こどもの城」小児保健部心理相談員などを経て、現職。専門領域は保育学、発達臨床学で、保育者養成、および保育という臨床的な場での個々の子どもの発達と心的世界の理解やそれに対する援助のあり方を研究している。OMEP（世界幼児教育機構）日本委員会理事、財団法人こども未来財団理事などを兼任。主な著書に、『自由保育とは何かー形にとらわれない心の保育』（フレーベル館）など。

# panel discussion

倉橋は、「充実指導」という言葉を使っていますが、保育者によるフィードバックや質問に教育的な意図が見え隠れすると、自己形成力の手助けにはならないと考えました。保育者の意図が表に出ず、あくまで子どもが自分で気付いたかのように感じられる投げかけをすることが、充実指導なのだと思います。

倉橋は、誘導保育は一人の保育者ではできず、園という環境を生かし、集団や仲間、空間が持つダイナミズムが可能になると述べています。この点について、私も同じことを考えています。

## 一人ひとりを読み取る記録と俯瞰的な記録の両方を持つ

**神原●** 河邊先生は、これだけ遊びの重要性が言われながら、遊びを中心とした保育がなかなか定着しない状況を指摘されました。一方で、雪遊びをする子どもに絵の具を差し出して遊びを豊かにするようなかかわり方ができる保育者もいるわけです。こうした資質は、一体、どのように身につくのだろうかという疑問を持ちました。保育者の養成課程の課題がかかわってくるのかもしれませんが。

**河邊●** 養成課程も関係しますが、それより園長の考え方が大きいと思います。どのような保育をしたいのか、とことん考える必要があります。絵の具を提案した結果、遊びが広がったわけですが、保育者の頭の中には自身の経験を踏まえた見通しや予測があったのでしょうか。それがなければ、あの場面で絵の具は出さな

いと思います。

予測に反することや予測を超えることも、たびたびあるものです。そこで、まず保育者としての予測をしっかりと持つこと、そして実践においては、予測を横において、子どもが実際にどのように考え行動しているのかを観察すること、この2つを常に心の中に共存させることが大切です。上手く援助できない原因は、予測の範囲が狭い、保育者自身が遊んだ経験が乏しい、やらなければいけないことで頭が一杯、遊びの観察が不十分、などが考えられます。

**神原●** 記録の重要性も述べられていましたが、記録を通して、遊びを援助するスキルや感性は身につくのでしょうか。

**河邊●** 記録することはとても大切だと思います。ただ、惰性で記録するだけでは全く意味がありません。どのように記録すれば、必要なことが見えてくるかという試行錯誤が必要でしょう。

保育記録は、子どもを対岸に置くようにして、「あんなことをした」「こんなことをした」と書き連ねるだけでは、子どもと保育者との相互関係が生まれません。その時に自分がどう感じたか、何をしようと思ったか、実際に何をしたか、それを受けて子どもはどのように変化したかなど、子どもとの関係性を踏まえた記録が重要です。

**大豆生田●** 雪遊びなどの事例を通し、保育者の心が動いて、ワクワクした思いで子どもの姿を見守っている様子が伝わってきます。遊びが広がっていく背景には、そうした保育者の思いがあるのでしょうか。

そんな生き生きとした情景を記録する方法として、エピソード記述があります。子どもとの関係の中で、保育者が感じたことや発見したこと、また個々の子どもの興味・関心や課題などを記録するスタイルです。

一方、もう少し俯瞰的な視点からの記録もあります。ドキュメンテーション型などが代表的です。子どもを羅列的に見て、遊びの群れの中での様子を捉えるやり方です。これらは、どちらかを選ぶのではなく、両方あることが大事です。ただし、現在の保育者が置かれた状況下では、記録にかかる負担は非常に大きいという課題も付け加えておきます。

## 子どもを類型化する見方は頭の中にマップを持つこと

**上垣内●** 俯瞰的に見た記録は大切だと、私も感じます。河邊先生が仰ったように、多人数を保育するには、ある程度、類型化することは重要でしょう。類型化は、頭の中にマップを持つことだと思いますので。

一方、一人ひとりを丁寧に読み取る記録も、もちろん大切です。個を尊重する視点を持ちながら、クラスの一日のダイナミズムをどう捉えるか。容易ではありませんが、これを追求していくことが、本日のテーマである遊びの質を高めるこ



榊原洋一

とにつながるのではないのでしょうか。

保育記録について踏み込んで考えるために、ここでニュージーランドの事例を紹介させていただきます。ニュージーランドには、「テファリキ (Te Whariki)」というカリキュラムがあり、それを評価する「ケイ・ツア・オ・テ・パエ (Kei Tua o te Pae)」というツールがあります。

テファリキは、「エンパワメント」「全体的発達」「家族とコミュニティ」「関係性」という4原則、そして「心身の健康」「所属感」「貢献」「コミュニケーション」「探求」という5要素によって構成されています。「子どもが何かできるようになる」ことを目指すのではなく、有能な学び手である子どもがどのように学んだかというプロセスを非常に大事にするカリキュラムです。そうした保育理念を大事にするためには、それにふさわしい評価の仕方があるという考えから、ストーリーを通じて評価するケイ・ツア・オ・テ・パエが生み出されました。

幼稚園教育要領や保育所保育指針も、しっかりとした保育理念とカリキュラムを提示しているのですから、ニュージーランドのようなすっきりとした評価や記録の制度を検討しても良いのではないのでしょうか。例えば、幼稚園教育要領では、「5領域×心情・意欲・態度」が基本となっていますが、「何をするか」よりも、「保育を通じた心情・意欲・態度の育ちを見ていく」という視点にふさわしい、評価と記録のツールがあるといいと思います。

## 遊びはあくまでプロセス優先 コンテンツは代替可能

**榊原●** ここで会場からご質問を受け付けたいと思います。

**会場** 山形県の私立幼稚園の理事長兼園

長です。Guided playについて、個人的な経験を交えて質問させてください。私の趣味の釣りに、息子を幼児期から連れて行っていました。基本的な安全対策やルールを教え、最低限の釣り方を教えただけで、後はできるだけ子どものやりたいようにやらせました。口出ししたくなることは多々ありましたが、堪えていると、自己流で釣果を上げるようになり、今では私を超える釣り好きになりました。こうしたやり方も、Guided playと言えるのでしょうか。

**河邊●** 鳥取大学の「コホート研究」ではまさにそのことを研究しています。小学生の生活満足度を調査していますが、親の心配の多くは杞憂で、子どもは満足して生活しているという結論を提示し、保護者の過保護や過干渉があると、社会性の獲得にブレーキがかかると指摘しています。今のご質問で言えば、父親とい

う憧れのモデルがいて、安全が保障された上で、自己探索できる自由度がある。そして、ある程度の認めもある。抜群の学習環境と言えるのではないのでしょうか。私が、Guided playで懸念しているのは、学ばせるために、いわば遊びが利用されることです。今お話しされたような学び方は、とても良いと思います。

**上垣内●** 河邊先生が懸念されている点は、遊びがコンテンツ優先になり、いかに効率良く身につけるかばかりを追求してしまうことだと思います。コンテンツではなく、あくまでプロセス優先であるべきだと、私も思います。誰と、どのように学んだかということから、ストーリーが生まれるのだと思います。コンテンツは代替可能と言えます。

**榊原●** とても重要なお指摘が多々ありました。本日はどうもありがとうございました。

panel discussion